みずきちゃんを泣かせたいだけの話

梵尻

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みずきちゃん可愛い。あーゆー小悪魔系のツンデレ美少女は泣かせたくなるよね。そーゆーお話です。

最近パワプロアプリを始めてめちゃくちゃはまったので（アプリで使ったことないけど）好きなみずきちゃんの可愛さをアピールするだけの話です。

パワプロ　を知らない方も、ぜひ橘みずきと画像検索をしてお読みいただければその可愛さが伝わるはずです。

時間軸は本筋のパワプロではなくアプリ準拠。しかし、学校の指定や時系列、選手能力設定など細かい設定は、歴代作の設定をごちゃ混ぜする形で行います。

目次

みずきちゃんを泣かせたいだけの話 1 ―― 1
みずきちゃんを泣かせたいだけの話 2 ―― 12
みずきちゃんを泣かせたいだけの話 3 ―― 21
みずきちゃんを泣かせたいだけの話 4 ―― 31

みずきちゃんを泣かせたいだけの話　1

「せ、ん、ぱぁーいっ」
嫌な予感がする。
わが野球部の最強にして最恐の小悪魔系後輩。
その名も、橘みずき。
勝気な釣り目をこちらに向けると、サイドに結わった水色の髪の毛をあざとく揺らす。
かわいい見た目に反して、されど投げる球は一級品で、左のサイドスローからミットをめがけて寸分たがわず放つ制球力と打者の左右を問わずに責めることのできる二種類のシンカーとスライダーというキレのある変化球を持つ、そんな素晴らしい投手。
――そして何より、彼女が猫なで声で俺の名前を呼んだ時に、いいことがあったためしがない。
「ん、おはようみずきちゃん」
「朝から会うなんて、奇遇ね。……はっ、先輩、もしかして私の事ストーキングしてる？」
「どうしてそうなる……」
出会い頭から、小悪魔節を炸裂させるあたりは流石というべきだろうか。
「そりゃあ、同じ朝練に向かってるんだから会わなくもないでしょ」
「まあ、私かわいいから、あとをつけたくなる気持ちもわかるんだけどー」
「無視ですか……というか、自分で可愛いって……」
「せんぱぁ～い？　今何か言いましたかー？」
「い、いいえ何も」
「後をつけるにしても、節度を持ってのストーキングにしてよねっ」
「あー……もう、はいはい」
俺に勝ち目はないな、そう思って適当な返事で匙を投げる。
「と、こ、ろ、でぇ～っ」
再びの猫なで声で、愛嬌たっぷりに口を開く。普段の勝ち気な目つ

きとキツい性格をうまく使い分けている上目遣いは、いわゆる「ギャップ萌え」を感じさせる。かわいい。
……これで人使いの荒い性格さえまともだったらパーフェクトなのに。
「む、今何か失礼なこと考えてない？」
「いやいやまさか、それはそれで需要はあると思うよ」
主にMのお方々に。
「需要？　ま、いいや。それより先輩、ここで出会ったのも何かの縁だし、私の荷物持ってよ」
「ええー」
「ストーキングするほど私のことが大好きな先輩なら、荷物持ちだなんてご褒美じゃない」
「少なくとも俺にとってはご褒美じゃないから……」
一定層の方々にとっては、これもまたご褒美なのであろう。
「お願いしますよ、せ、ん、ぱぁーいっ」
くっ、相変わらずその上目遣いかわいい。
わがままで、素直じゃなくて、人使いは荒い。だというのに、毎回のように俺はこの上目遣いに負けて、結局は彼女にまんまと振り回されてしまうのだ。
だけれども、明るく活発でチームのムードメーカーにもなってくれるし、根は意外と真面目で、素直になれないのもそれはそれで可愛くて。そこのところを本人が知っているのかどうかは分からないがついつい甘やかしてしまう。
「もう、しょうがないなぁ。今日だけだからね」
「やったー！」
……まったく、みずきちゃんには敵いそうもないな。
??
「む、先輩とみずきか」
学校の近くにまで差し掛かると、みずきちゃんと同じく後輩の聖ちゃんと出くわす。朝も早いというのに、いつものように凛々しい相貌は崩れることはなく、大和撫子という感じだ。

「あ、聖ちゃん。おはよう」
「おっはよー聖」
「みずきのテンションが朝から高いのも、先輩がいつもの二倍荷物を持っているのに関係がありそうだな」
「さすが聖ちゃんの観察眼。うちの正捕手だけあるね」
細めた目でこちらを見る聖ちゃん。お手本のようなジト目だ。
彼女ももちろん、みずきちゃんに負けず劣らずの美少女であり、朝から目の保養になる。ちなみに性格はみずきちゃんと違って真面目でおとなしく、ぜひ朝ご飯を毎日作ってもらいたい。
「どうせ、みずきが先輩に無理やり荷物持たせたとかそんなところだな」
「あったり～～♪」
「うんうん、流石仲良しバッテリー。これが以心伝心というやつか」
聖ちゃんは頭を抱えると、ため息交じりに口を開く。
「先輩は何を言っているんだ、またみずきを甘やかしているのは、誰だって見ればわかるぞ」
「それもそうか」
みずきちゃんの無茶な性格は今に始まったものでもなく、多くの人が実際に振り回されている。だがしかし、なぜか俺に対する対応は輪にかけて厚かましいものであり、周りの人たちにとっても見慣れた光景となっているのだろう。
「まったく」とぎりぎり聞こえる程度の音量で吐き出すように嘆くと、
「先輩はみずきのことを甘やかしすぎだぞ」
肩をすくめて、一つ間を取って、ぴしゃりと言い放つ。
「はい……」
特に反論する余地もない俺は、親に叱られた子供のように背中を丸めて、尻すぼみに返事をする。そんなこちらの様子を見て、みずきちゃんはいつもの小悪魔ちっくなあざと可愛い笑顔で弁明する。
「いいのよ聖、先輩も好きでやってるんだし」
「いや別に好きでやってるわけでは――」
「今何か言った？」

みずきちゃんは満面の笑みを浮かべているというのに、目が全然笑っていない。有無を言わせる威圧感がそこにある。投手威圧感はリリーフでは有能な特殊能力だからセーフということにしておこう。

それと、……まあ、俺が甘やかしてる原因として、実際に憎めなくてかわいい後輩であるみずきちゃんが好きだからというのもあるのだ。先輩が好きでやっている、というのも、あながち間違えではないのかもしれない。

「いいえ何も」

くだらない会話をしながら歩いているうちに学校に到着する。この日の朝練は野球部のみがグラウンドを丸々一面使える日だ。そんなわけで他の生徒は1人もおらず、昼の騒がしい学校とは似ても似つかないほどだ。

朝っぱらからの練習というものは多少憂鬱ではあるものの、今日はバッティング練習を気兼ねなくできると考えれば、幾分か心持ちも楽になる。校門をくぐれば、校舎と部室、そして更衣室はすぐのところにある。

「まったく先輩は……。そういうところが甘いんだぞ。それと、みずき。更衣室は男女で別なんだから早く自分の荷物持って行くぞ」

「ちぇっ……はぁーい」

不服そうにしながらも俺から荷物を受け取るみずきちゃん。やっぱり、この二人でいてくれたほうが安定感があるなと改めて感じさせられる。

ずっと2人でいてくれるのならば、こちらとしてもありがたいのだ。なぜなら、不思議なことに、みずきちゃんの俺に対するあたりは一対一であるほど強くなる。原因は未だ不明であるものの、聖ちゃんがいれば多少マシになるのは事実だ。

「それじゃ、またあとでね。みずきちゃん、聖ちゃん」

「うむ」

「また後でね〜〜先輩」

まったく、朝っぱらからみずきちゃんと遭遇するとは。本当に嵐のような時間だ。

――でも、こんな時間も、俺は嫌いでは無い。
さて、早く着替えてしっかりと練習しますか。
「あっ、センパーイ!! 覗かないでね!!」
……。
「誰がのぞくかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
精神ポイントが１０上がった。
やる気が下がった。
▽
??
更衣室。
それはただ単に服を着替えるために存在するだけの部屋。この言葉をいきなり叩きつけられたとしても、多くのものは「だからなんだ」と疑問を浮かべて怪訝な表情とともに足早に去っていくだろう。
だが、接頭句として「女子」とつければ。
その言葉は一瞬にして理想郷へと変貌を遂げる。
女子更衣室。
それは、男子学生にとってはムー大陸同様に神秘的かつ未踏の大地であり、禁断の果実が人数×２個ぶら下がるエデンであるのだ。
「パワプロ君は、朝からハーレムでうらやましいでやんす」
「矢部君にはあれがハーレムに見えるのかい……」
しかし残念なことに、ここは男子更衣室。
しかもそれは、そんじょそこらの更衣室ではない。硬式野球部の更衣室なのだ。
むさくるしい男たちが所狭しと詰め込まれ、汗と制汗剤と汗と汗のにおいに満ち満ちた地獄のような空間である。
「あーあ、おいらも女の子と登校したいでやんす」
「荷物が二倍になってもかい？」
「それはご褒美でやんす」
「身近に需要あったよ……」
「需要？　何のことでやんすか」
「いいや何でもないよ、矢部君」
俺はそう呟きながら、ユニフォームに袖を通す。

矢部明雄。瓶底眼鏡と独特な語尾がトレードマークの俊足外野手である。空気を読めずチャンスに弱いが、意外と憎めない男であり、クリスマスやバレンタインにはお互いの傷をなめあえる相棒的な存在だ。
「それにしてもみずきちゃん、今日は朝から容赦なかったよなー」
「また荷物持ちでやんすか？」
「そうなんだよね。まあ、別にいいんだけどさ」
「ダメでやんすよ、パワプロ君は甘すぎるでやんす！　ここは先輩らしく強気に行かなきゃだめでやんすよ!!」
「それ矢部君が言えるセリフ？」
　矢部君はこんなことを言っているが、彼がみずきちゃんに対して強気に出ているところを見た試しが無い。しかも、みずきちゃんの矢部君に向ける当たりの強さが普通とは別ベクトルであるのだ。あまり興味がないと言うべきか、それこそ別段思い入れのない手駒で遊んでいるだけというべきか。
　……まあ可愛そうだから本人には言わないけど。
「それにしても」と仰々しく矢部君は言い、
「今頃、みずきちゃんと聖ちゃんは着替えの最中でやんすかね～～ムフフッ」
「流石に気持ち悪いよ矢部君」

　男子更衣室と女子更衣室は、少し離れた位置にある。というのも、部室棟が男子競技と女子競技で分かれているため、野球部の女子部員もわざわざ女子部の使う部室棟に行って着替えているのだ。
　距離にしては遠いというわけではないが、大声を出さない限り、本来ならば声が聞こえることはないだろう。
「ねえ、聖」
「うむ？　どうした」
「なんか寒気がしたんだけど……」
「奇遇だな、私もだ」
　ところ変わって、ここは件のエデン、女子更衣室。

矢部君のむふふな望みは届かず、２人はすでにユニフォームに着替え終わっていた。
「朝練はねー、メイクと前髪崩れるし、準備のために早起きしなきゃいけないから面倒なのよねー」
グローブとトレーニングシューズを鞄から取り出すと、気怠そうに言う。そんな様子を横目に、六道聖はいつものお返しだと言わんばかりに口を開いた。
「朝からちゃんとメイクして、パワプロ先輩に見せるためにか？」
「な、な、な、何言ってんのよ聖――ッ!!」
「なら、朝からちゃんと先輩に会えて良かったな」
「ちがっ、べつに、そんなんじゃないからー!?」
聖は「まったく」と呆れた表情で立ち上がり、
「そうやって素直になれないでいると、いつまで経っても付き合えないぞ。それどころか、先輩が他の誰かと付き合い始めるかも知れないぞ？」
みずきは動揺を隠しきれない様子で、手をあたふたと振る。周りには当然、聖しかいないと言うのに2、3度室内をぐるりと見回して、
「え――――、いや、でも、まさか、そんな」
「……先輩はモテてるからな。そのうち、彼女を作ってもおかしくない」
「うぅ……」
この素直な姿を見せれば、パワプロ先輩もイチコロなのに。聖はそう思う。しかし同時にこの様子では当分、思いを伝えるのは無理そうだなと悟る。
なにせ、２人きりになるといつもよりキツく当たってしまうほどの、もはや絶滅危惧種ともいえる生粋のツンデレというやつなのだ。そんなに簡単に素直になれるなら、今頃付き合うことができたはずだ。
「で、でも～、今更素直になれって言われたって出来ないし、っていうか、もともとこういう性格だから仕方ないじゃん」
「そう言ってるうちに、先輩は彼女を作るのだな」

「聖のバカ――ッ!!」
「……馬鹿と言われても、先輩が誰かと付き合っても、本当に知らないからな」
聖はそのまま外に向かって歩き出す。いつも強気でＳっ気の強い彼女をここまで動揺させることができるパワプロ先輩の話題は偉大だな、と思いながら声に出さず笑う。
背中を向けているためその表情に気がつかれることはなく、追いかけるようにしてみずきも駆け足で出口に向かった。
「待ってってば聖！」
「なんだ？」
「す、素直になるって、どうすればいいのよ」
手をいじりながら気恥ずかしそうにするみずきを見て、聖は苦笑を漏らす。
好きだからいじってしまうというのは、小学生男子みたいだ。アピールをするのにも、元来の性格でもあるのだが多少背伸びをして小悪魔キャラになってしまうのもなんと不器用なことか。
見た目はかわいいのだし、正統に攻めていけば良いというのに。
「とりあえず、先輩に対して優しくしてみるのはどうだ？」
「優しく、ねぇ……。例えばどういう風によ」
ううむ、と顎に手を当て聖は考える。
（そういえば、先輩。この前矢部先輩とギャップ萌えどうだとか話していたような）
しかし、ギャップ萌えとは如何なものか。俗っぽい単語には疎い聖は頭脳をフル回転させる。
ギャップというのだから、普段とは違うような差異のある行動をとることだろう。であれば、それは配球を組み立てるのと似ている。セオリー通りではあるが、速度の遅いカーブの後のストレートのように組み立てればいい。
「……たとえば、だな。みずきはいつも先輩に甘いものやジュースをおごってもらったりするだろう。だから、そこはあえて逆に、みずきが先輩に何かあげたりしてみるのはどうだろうか」

「ふむふむ」
「考えてみろ、いきなり異性から物をもらったりしたら、自分に好意があるのではないかと疑うだろ？」
「確かに」
「それが普段そんなそぶりを見せないみずきが先輩に何かをあげたとしたら――」
「！」
「どうだ、みずき。完璧な配球だろう」
「流石ね聖！　これで先輩も三球三振よ！」
　大人びている六道聖も、小悪魔系を演ずる橘みずきも、残念なことに、生粋の生娘であった。
　確かに、男という生き物は女子からのプレゼントに弱い。
　だが、理由もなく突然これをやろうとしてうまくいく保証はどこにもないのだが――
「ふふふッ、先輩のデレデレした顔がすぐにでも浮かんでくるわ」
「うむ、流石みずき。その調子でいけば必ずやる打ち取れるぞ」
　自ら動くという恋愛経験に乏しい彼女らは、単純すぎる作戦を、盲目的に信じる事になったのだ。
「そうと決まれば早速――」
　ガチャリと、音が経つ。年季の入った金属特有の音が、床と扉の摩擦で鳴り響く。
「あ、みずきに聖。おはよー。なんか楽しそうにしてたけど、何話してたの？」
　こてんと、小首を傾げると、ぴょこりと、黄緑色のおさげが可愛らしく揺れる。橘みずきと六道聖の一つ上の先輩であり、２人の慕うサブマリンの投手。身長は１６７ｃｍで、キュッキュッボンの丸型フラスコ体型（矢部明雄談）の美少女。
　早川あおいが更衣室にエントリーする。
「いやー、そのー、たいした話じゃないといいますかー」
　明らかにしどろもどろになりながら、言葉を探すみずき。その様子を見て、あおいは頬を膨らませる。

「もう、2人だけの秘密とか、なんかやだな」
「うう、実は――」
先程聖に責められたからか、はたまたモンスター生娘は判断を失ったのか。いつもなら恥ずかしくて他人には決して言わなかった「先輩が好きである」という趣旨の話をみずきはあおいにしようとして――
「ストーップだぞ！」
「むぎゅ」
みずきの混乱した失投連発の口を、恋女房は体を張って見事にセーブ。左手で覆い失言を無事隠し切る。すると、みずきの耳元に口を持っていき、
（先輩のことを好きだってことはあまり他の人に言わない方がいいぞ）
あおいに聞こえないほどの小さい声でナイスなアドバイスをささやき戦術。
（な、なんで？）
なんだかんだと言われたら。
そんなの答えは簡単だ。
早川あおいもまた、パワプロくんに惚れているからだ。
この三人娘の中で、そのような複雑な事情になっている事を知っているのは聖だけであり、最悪のパターンである正面衝突を避けるために陰ながら努力をしていたのだ。
（なんでも、だ）
（わかったわよ）
「あー！　そうやって、また2人で内緒のお話ー？」
「違うぞ、あおい先輩。あおい先輩だけじゃなくて、まだこの話は他の部員誰にもしていないのだ」
内心では焦りながらも、正捕手としてのプライドを見せて、冷静に対応する。
「良かったー、ハブられてたわけではないんだね」
「まさか！　そんな事するはずが無いのだ」
「もしかして、新球種の話とか？」

新球種。
あながちそれは、間違いでは無いのかも知れない。
『パワプロ　先輩にものを貢いでみずきのギャップをアピールする作戦』は、いわば普段のみずきの態度をストレートだとすると明らかに変化球なのだ。つまりこれは、実質的にみずきの（小悪魔的）新球種習得イベントなのである。
「ま、まあ、そんなものだぞ。あおい先輩」
嘘では無い。決して、嘘はついていない。
なんなら、場合によっては修羅場に発展しかねないこの場を上手く乗り切ったのは、９回裏一点差ノーアウト満塁の大ピンチを自らのリードで凌ぎ切った時ほどの達成感を感じる。
「あ、あおい先輩。先に朝練行ってくるぞ。ほら、みずきも早く行くぞ」
最後には戦略的撤退。
これにて聖は、みずきの対パワプロ先輩の配球と、修羅場回避の配球を考え抜く事に成功した。

しかし。まったくもって、捕手というポジションは不遇である。
投手が打たれれば捕手の責任にされ、投手が抑えたら投手が褒め称えられる。なかなか日の目を浴びる事のないポジションだ。
気苦労は耐えることなどないし、自分が投手２人を引っ張って、背中を押さなければいけないのだ。決して、投手の足を引っ張ってはならない。
（やっぱり、私は『恋』など出来そうもないな）
淡い恋心は、野球と友と先輩と、言い訳じみた捕手の責任にして心の奥にしまうのだ。

みずきちゃんを泣かせたいだけの話　2

「せ、ん、ぱぁーいっ」
嫌な予感がする。
今朝に引き続き聞こえてくるのは、小悪魔系後輩みずきちゃんの、甘ったるい猫なで声。たぶん、今回も彼女は何かを企んでいるのだろう。
「なんだい、みずきちゃん」
日が傾き始めたころ、グラウンドのどこかから時刻を告げる鐘が鳴った。それは練習を終わらせ、帰り支度を促す合図だ。
運動部のうるさい声も鳴りを潜めて、茜色が校舎の白壁を染める中、俺は居残りでの自主練習をするべく準備をしていた。
「先輩、もしかしてこれから自主練？」
「うん、そうだよ」
「そっかー偉いね先輩」
「いやー、それ程でも」
かくいう自分も人一倍練習しているくせに。
いつも飄々としている彼女も、決して努力せずに上手くなったのでは無い。いくら野球の才能があるといえ、女性であるため骨格や筋力などで差がつくのが当たり前であるところを、努力で乗り越えてきているのだ。
彼女はそのようなところを表にはあまり出さないが、俺はこっそりと尊敬している。
「そんな頑張る先輩に、ご褒美をあげちゃう！」
「ほう、なんだなんだ」
いつもご褒美をねだる彼女がまさか俺にご褒美をくれるだなんて、珍しいことがあるものだ。
みずきちゃんはとこからか緑色に包装された、細長のものを取り出す。
彼女とその手元にあるものを交互に見つめて、これがおそらくプレゼントであると言うことを確認する。

「はい、ガム！　私からのプレゼントだよー！」
「おっ！　ありがと……」
俺は、珍しくみずきちゃんから何かをしてくれたということに対して、嬉しさを感じながらガムに手を伸ばす。
しかしまあ、ガムとはな。
勿体ぶってプレゼントと言うのだから、正直なところもう少し何か良いものをくれるのかと思っていた。とはいえ、彼女のニヤニヤとした笑みを見ると、内心では嬉しくもある。
ガムは既に空いている。2、3個は先に食べたのだろう。ミント味のガムを近頃食べていないなということを思い出して、以前食べたのはいつだったかと考えて、連鎖するようにいくかの記憶の木の枝たちが揺れ始めて――
そうして、取る直前となって、あることを思い出した。
――いや、待てよ。
こんな光景を、俺は見たことがあるはずだ。
似たような映像が脳内にある。酷い経験を体が覚えていた。
確か以前、小悪魔のコスプレ？　をした彼女が似たようなシチュエーションで俺にガムを出したことがあったはずだ。
その時、俺は見事に罠に引っかかった。
1回目は取ろうとする際に、パチン、と指を挟んでくるやつで、2回目に関しては指先が触れた瞬間に電撃が流れる仕組みになっていた。
つまり、脳内にある最後にミント味のガムを食べた記憶は日常の風景すぎて残っておらず、ミント味のガムを騙られて2度ほど痛い目を彼女に見せられた記憶が蘇ってきたのだ。
だとすれば、果たして今回は、どんな仕掛けがあるのだろうか。みずきちゃんのことだ。まず仕掛けが何も無いとは考えられない。必ずや過去の仕掛けを上回ってくるに違いない。
電撃以上となると……なんだ？
想像もできないぞ。それほどにヤバイ仕掛けがあるのかも知れない。

「――いや、もうその手には乗らないぞ」
「……えっ？」
「みずきちゃんがいきなり理由もなく俺にガムをあげるってのも怪しいし、それに、前にもあったじゃないか、こういう事。あの時は、まんまと騙されたなー」
「ち、ちがっ」
　みずきちゃんはなおも可愛らしく否定してくるのだが、負けてはならない。その小悪魔的部分につられて何度痛い目を見たことか。
　見事なまでにちょっとした動揺を、細かい表情や仕草までもうまく演じているなと思う。眉の端は垂れ下がっていて、肩を寄せた拍子にユニフォームのしわはいっそう深くなって。
「いやーでも危なかった。自然な流れで取らせようとするのは流石みずきちゃんだなぁ」
「違くて、本当にただのガムだよ！」
「はいはい」
　今日は珍しく粘るのだな、と思うと同時に、そこまで凝った何かを仕掛けているのだな、と改めて思う。「よく気づいたね、せんぱ～い」とか「ちぇっ、今回は引っかからないか」とか、小悪魔的な発言をすぐさましてくるのが彼女の常だと思っていた。やはり、今回の罠は相当なものなのかもしれない。
　であれば是が非でもかかるわけにはいかない。どうせなら矢部くんあたりに犠牲になってもらおう。
　俺はすでに似たような罠に引っかかっているのだから、その役目は彼に譲ろう。電撃以上だとしても、もしかしたら「ご褒美だ」と言って喜んでくれるのかも知れない。
「でも俺、騙されそうだったし、矢部くんあたりを狙ってみれば？　あざといのに弱いだろうし上手くいきそうじゃない」
「……先輩のバカ」
　珍しくみずきちゃんはうつむきがちに、何が呟くと、
「え？」
「あらら、残念。２回目じゃ引っかからないよね！　さすがに学習能

力はあるみたいね」
いつも通りに笑って見せた。
その流れでの小悪魔表現は、まるでいつもの感じとは違っていた。まったく普段通りに戻った彼女は、こちらに向かって上目遣いと甘えた声で難を逃れる。
「俺のことを何だと思ってるんだよ……」
ちらりと見えた、みずきちゃんの表情。普段見ることのない表情であったし、一瞬のことであったため、その表情から心情を深く読み取ることはできなかった。俯きがちに放った「バカ」という一言も、普段から言っているような声のトーンではなくて、心臓が強く跳ねたのを感じる。
しかし、それも本当に一瞬のことである。
そこにあるのは、いつも通りの小悪魔的な微笑みと、いつも通りのかわいさだけだ。俺は、理由もなく安堵する。
「じゃ、俺は準備するから。また後でね、みずきちゃん」
「バイバ～イ！」
ドキリ、とした気持ちがバレないように、逃げ出すようにしてその場から離れる。
変だ。
みずきちゃんは可愛い後輩であって、そーゆー関係性ではないはずだ。
一足でも早く練習を始めなければ。俺はそう思い、グラウンドを足早にかけていく。

「……はぁ」
彼がさった後、残されたみずきは一人ため息をつく。
運の良いことに、ちょうどその瞬間は誰にも見られておらず、強気じゃ無い自分を守ること自体には成功した。
だが、それでも。
いつも以上に可愛く振る舞ってみたものの、彼はいつも通りにいな

してきただけであった。いっそのこと、本当にあのガムに何か仕掛けをしていれば、こんな思いをしなくて済んだのでは無いかとまで思う。

「そりゃ、……そうよね」

舞い上がっていた自分が馬鹿みたいだった。

それもそうだ。慣れないことをやるものではない。いつもの自分の態度から、先輩があのような反応をすることはわかり切っていたはずだ。それなのに、調子に乗って、自己を過信して、馬鹿みたいな失敗をする。結局のところ、いつもの行いが自分に帰ってきたのだ。

「もうっ……！」

やり場のない怒りや苛立ちだけが積もる。

「あれ、みずきちゃんも居残り練習でやんすか？」

「メガネ先輩……、ちょっとあっち行ってて」

「いきなり酷いでやんす！」

突然現れた矢部先輩に、その呑気な口調に腹を立ててしまう。別段彼が悪いと言うわけでも無いのに、そんな苛立ちを隠し切ることができなくて、手を強く握る。すると、そこにはタネも仕掛けもないチューイングガムがあった。

「……これ、あげる」

持っているのも馬鹿らしく感じた。腹を立てるのも馬鹿らしく感じた。

捨てるようにして潰れかけたガムを矢部先輩に向けて乱雑に放り投げると、振り返ることなくその場を後にする。

「やったー!! でやんす」

やはり、私にはできないのかもしれない。

パワプロ先輩は、聖が言うのにはモテる。

……まぁ、確かに、ちょっとだけカッコいいし、野球も上手いし、性格も優しくて魅力的だし。モテてもおかしくないのかも知れない、

それに、彼の周りには、自分より魅力的な女性もいるだろう。聖だってその一人であるし、女子マネージャー達もいる。そして、パワプロ先輩と幼なじみであるというあおい先輩もいるのだ。２人の仲

は、恋人までは確実にいっていないものの、何が起こるかなんてわからない。
少なくとも、自分よりは高い可能性があるだろう。
「……はぁ」
深いため息を出す。重苦しくて、あたりの空気が淀んだのではないかと錯覚する。
茜色の夕陽は、時間としてはほんの一瞬で、校舎もグラウンドも、紅潮するのはやめていて、だんだんと暗闇に浸食されていた。
今日は、居残り練習やめた。
重苦しさと、薄暗さを追い払うように、駆け足で更衣室へ向かう。このままでは、窒息してしまいそうだったから。
??
「聞いて欲しいでやんす」
「どうしたんだい、矢部くん」
「みずきちゃん、おいらに惚れてるでやんすよ」
「頭大丈夫？」
「大丈夫でやんすよ」
居残りの練習を終えた帰り道。矢部くんはコンビニのホットコーナで買った、ピリ辛のフライドチキンに夢中になりながら、そんな夢物語を口にする。
「実は今日、みずきちゃんからガムを貰ったでやんすよ」
「……いや、ガムをくれたくらいで惚れてるって、どーゆー事だよ矢部くん」
「だって、あのみずきちゃんがでやんすよ!?」
そう言えば。居残り練習の準備をしていたときのことを思い出す。あの時も、みずきちゃんが俺にガムを渡そうとしていた。であれば矢部くんはきっとあれを受け取って――
「で、そのガムはどんな仕掛けがあったの？」
「仕掛けでやんすか？　何言ってるでやんす。普通の美味しいガムだったでやんす」
「……え？」

「居残り練習の本の直前でやんすね、貰ったのは。羨ましいでやんすか～？」
おかしい。
ちょうどそのタイミングで、みずきちゃんは俺にもガムを渡そうとしていたはずだ。なのに、なぜ矢部くんは仕掛けに引っかかっていないのか。
俯きがちだった彼女の横顔を思い出す。
もしかして、あのガムは本当にタネも仕掛けもなくて、ただ善意で俺にあげようとしていたものだったのではないだろうか。
――なんて。考えすぎだな。
たかがガムだ。
誰にだってガムくらいあげたりする。しかも、善意で俺にあげようとしていたのならば、彼女のセリフと合わないじゃ無いか。あの時はっきり、「あらら、残念。２回目じゃ引っかからないよね！　さすがに学習能力はあるみたいね」と言っていたのだ。
矢部くんの時には、もうガムを使っての悪戯に飽きていたとか、そんな理由だろう。
「矢部くんはいいなー、俺なんてまた騙されそうだったんだからね」
「それってつまり、みずきちゃんはやっぱりオイラのこと!?」
「ははは、それだけは無いかな」
「酷いでやんす――!?」
??
「聖ぃ……」
「どうしたんだ、こんな時間に」
時刻は真夜中の１２時を、少し過ぎて１３分。お風呂にも入り、朝練も早いし、さて寝ようと決意したタイミングで、聖の携帯に着信が入った。
通話の相手はもちろん、橘みずきだ。
いつもの勝ち気な少女は鳴りを潜めて、電話越しに聞こえてくるのは、塩をかけられた水菜のように、萎れた声だった。
「パワプロ先輩のこと、やっぱり無理だよぉ」

どうせまた、変なプライドが邪魔をして、素直になれず失敗したんだろう。との思いは当然口に出すことはなく、心の中に秘めておく。
「……一応聞こう。何があったんだ？」
実はね、と言い居残り練習の直前にあった一部始終を話す。
一言で簡単にまとめれば「先輩がガムを受け取ってくれなくて悲しい」という事であり、やはり先程の私の予想は当たっていたのだなと納得する。
「ふむ、それは確かに先輩も酷いかもしれないが、元はと言えばみずきの今までの行動に問題があったからな」
「アドバイスしたの聖じゃない！　そこまで言わなくても……」
「確かに私は提言したが、まさかガムなんてものをあげるとは思ってもいなかったぞ」
「ど、どうしてよ!?」
スマートフォン越しでも、感情がまるごと伝わってくるみずきの悲痛な叫びに、失礼だなと思いつつも苦笑を漏らす。もし目の前に彼女がいたのであれば、どれほど機嫌がナナメになる事やら。
しかし、パワプロ先輩に対して何かをあげると言っても、まさか、たかがガムだとは思いもしなかった。
もう少し女の子らしいというか、乙女チックというか、何にせよ彼に対して意識付けができるアピールが必要だった事に揺るぎはない。とはいえ、自分の提言も具体性に欠けていたのであって、一概彼女を責めるわけにはいかない。
「考えてもみろみずき。お前は先輩にガムをもらっただけで、舞い上がるほど嬉しくなるか？」
「それは、その……えへへ……」
この様子、想像しただけで舞い上がるほど嬉しくなっている。
……全く、ここまで恋の病が重症だとはとは思ってもいなかった。
「ま、まあそれはそれとして。例えば、先輩からガムを貰うのと、ちょっとお洒落な洋菓子を貰うのと、どちらが嬉しい？」
「……どっちも嬉しいわよ」
みずきはさも当然かのように言う。

「どっちかと言ったら？」
「それは、まあ、お洒落なお菓子のほうね」
「つまり、そう言う事だ」
「つまり、お洒落な洋菓子を渡せばいいのね!?」
「そうじゃないけど……、そう言う事にしておこう」
あくまで、例えばの話であり、男性から女性に対する贈り物の話である。大事なのは気持ちというのはもちろん存在するが、結局はその気持ちを表すために、それ相応の値段と、それ相応のプレゼントは必要になってくる、という話であったのだが。
「よーし、ならパワ堂のプリンね。いつも奢って貰ってるし、先輩にプレゼントしてあげれば、魅力的な私にイチコロね」
この様子では、正確に通じていないらしい。
しかし、間違えを犯しているというわけでもない。そもそも、本来はパワプロ先輩に対するアプローチと言うのであれば、協力する必要性も無いのだ。
これ以上は、流石に、自分の力でどうにかして欲しいものだ。
電話越しに舞い上がる彼女の存在を確かに感じながら、バレないようにこっそりと通話終了のボタンを押した。

みずきちゃんを泣かせたいだけの話　3

「せ、ん、ぱぁーいっ」

嫌な予感がする。

3日連続で聞こえてきた相変わらずの猫なで声というのも、別段珍しいことではない。だが、昨日の少しだけ普段と異なる彼女の態度を見た後だと、いつも以上にみずきちゃんという存在に対して敏感になっていた。

ざあと雨音が廊下に響く。

誰も閉めようとしない程度には高い位置にある廊下の窓からは、誰も気に留めない程度の雨が侵入してきていた。

そういえば、朝から降り続ける雨は、今日一日続くのだと、憂鬱そうな気象予報士とご機嫌な女子アナウンサーが今朝言っていた。

いつもなら雨は喜べない。

その理由として「雨の日はノスタルジーに浸ってしまう」だとか「ネガティヴになってしまう」だとか言えれば、少しは格好がつくのかもしれないが、普通の男子高校生にはそんなお洒落な情緒は、生憎持ち合わせていない。

ただ単純に、高校球児らしい理由である。

それは、外での練習はできず、屋内での地味な練習しか行われないからだ。

――だが、なんと本日は珍しく雨による練習の中止が告げられたのだ。

高校球児にとって、練習が休みになるとの報を聞けば、ノスタルジーに浸る暇も、ネガティヴになる余裕ももっぱらない。

その知らせを聞いた時こそは何かの間違えだと思ったほどだ。しかし、他の部員に確認を取るとどうやらそれは事実のようである。まさに春の珍事だ。何より最高のプレゼントだ。

このような事態が起こるのであれば、雨の日も悪くない。

「あれ、なんでみずきちゃん二階にいるの？」

そんな雨に濡れる廊下で、みずきちゃんと出会した。

ここ二階は、三年生の教室が立ち並ぶフロアであり、下級生である彼女とはここで出会うことは滅多にない。
俺のことを待っていたりしたのかな、と想像して、にやけ顔が零れそうになるものの、すぐさまそれを否定してキリッとした普段の表情に戻す。変に悟られて弱みを握られたらどうなるか、分かったものじゃない。
「なに……その間の抜けた表情。っとそれは置いといて。喜びなさい！　私がここに来たのは先輩に話があるからよ！」
彼女が俺に話をするためにここに来たということは、妄想の通りに俺のことを待っていたという事になる。
しかし、そこはさして重要でなかった。
意識的にキリッとした表情を作ったはずが、間の抜けた表情だと言われてしまったのだ。それについてのショックで、精神ポイントが減ってしまう。
「話って？」
「今日は特別に、私が先輩にパワ堂のプリンを奢ってあげる！」
「な、なんだって～！」
まるでデジャブだ。昨日もこんなやり取りをした気がする。
なぜか強気な態度で、俺にガムを使ったイタズラを仕掛けようとしていた時と、同じ誘い方だ。とはいえ、パワ堂のプリンを奢るというのは、流石に罠を仕掛けることが出来ないのではないだろうか。
「それって、今日の放課後に一緒にパワ堂に行くってこと？」
「そーゆーこと」
みずきちゃんの目的は、真偽不明だ。
しかし、部活も無くなり暇になった日であるし、彼女のお誘いを断る理由なんて、当然のようにひとつもなかった。
むしろ、これは、デートなのでは無いだろうか。
イタズラ好きの小悪魔と言え、学校でも評判の美少女なのだ。その子と放課後スイーツデートができる状況において、なぜ逃げの選択肢があるのか。
答えは否。断じて否。

逃げ玉は良い特殊能力だが、漢には、打たれるかもしれないと思っていても、ど真ん中ストレートで迎え撃たなければならない時もあるのだ。
「よし、乗ったよ、みずきちゃん。たとえそれが罠だとしても、俺はみずきちゃんと一緒にパワ堂に行くよ」
「罠じゃ無いしー」
下心のある漢の覚悟のこもった俺の声を、どうでもいいよと受け流す。
すると、彼女は何かを言おうとして。それを察した俺は言葉を待つ。
3秒待って、彼女は言葉を出さない。
沈黙が訪れる。
彼女は視線を上げ、俺の視線とぶつかる。
見てわかるほどに彼女は顔を赤くして動揺する。なぜだかこちらまで恥ずかしくなって、その動揺を気取られないように慌てて口を開こうとして――
先手を打つように「それじゃあ放課後ね」と彼女は言い放ち、颯爽とその場を離れた。
イタズラ好きの弊害か、彼女の逃げ足に関してはやはりいつも通りの速さを誇る。
俺は少しの間呆然とすると、やっとのことで冷静さを取り戻した。
しかし時はすでに遅くて、どこで落ち合う、とか、何時に、とか。聞きたいことは色々とあったのだが、踊り場へと消える陰とこちらとの間は、すでに言葉は届かない距離になっていた。
去り際にちらりと見えた彼女の耳は、クールな髪色とは真逆に、真っ赤になっているように見えた。気がする。
「まったく、困るなぁ」
「なにニヤニヤしてるでやんすか」
廊下にボケーっと突っ立ていると、矢部君に声をかけられる。
「え、ニヤニヤしてた今」
「してたでやんすよ。困るなぁ、とか言ってたでやんすけど、本当に

困ってるならそんな表情はしないでやんす」
おかしく思って自身の頬に手をやる。すると、確かに口角は吊り上がっていた。どうやら本当にニヤニヤしていたらしい。
「ふふふふふ、矢部君には教えないよん」
「えー！　酷いでやんす！　友情の崩壊でやんすー」
「ふはははは、何とでも言え！」
雨の日だというのに、やはり気分は爽快で。
今日の放課後が一段と待ち遠しい物となった。
筋力ポイントが２８上がった。
敏捷ポイントが１４上がった。
チャンスメーカーのコツをかなりつかんだ。
やる気が上がった。　▽
??
満を辞して放課後になった。
待ちに待った時間だった。
みずきちゃんの真意は分からないにせよ、一年に一度有るか無いかの雨天練習中止のこの日に、学校でも知名度の高い美少女と放課後デートが出来るのだから。これを嬉しく思わない男子はいないだろう。
高校生男子だなんて、可愛い子に誘われたら一瞬で勘違いをしてしまうという悲しい定めを背負う生き物なのだ。
もちろん今も、目前に迫った放課後デートに対する期待はある。
あるのだが。
「ラブレターなんて、まあ古典的な……」
みずきちゃんと廊下で話をした後、休み時間が終わるギリギリのタイミングで自分の席まで戻ってきた。その時、慌てて次の教科の資料を机から引き出そうとして、いつもと違う感触を指に感じたのだ。
机の中に入っていたのは、令和の時代にそぐわぬラブレター。
教科書とノートを立ち並べて、コンスタンチノープルさながらの城壁を作り、授業中にこっそりその内容を見る。すると、今日の放課後に四階の屋上前の階段の踊り場に来て欲しいと書いてあった。

差出人は誰かわからないのだが、教室に堂々と入って、堂々と机にラブレターを入れられたとなると同学年である可能性はかなり高くなる。というか名前くらい書いて欲しいなぁ。

しかしこうなってくると、流石にそこ場に赴かなければならない。だがしかし、放課後はみずきちゃんに誘われているのだ。あまり乗り気では無い。個人的な恋愛感として、ほぼ初対面であったりだとか、たいして思い出深く無い相手と付き合うのは嫌なのだ。野球に打ち込んでいる現状では、例えば、部活の仲間とかでならまだしも、ただのクラスメイトだとかなら考えられない。

「とりあえず、みずきちゃんにはちょっと遅れるって連絡したんだけど……」

スマートフォンのコミュニケーションアプリにて連絡を送ったのだがいまだに既読は付いていない。だとすると、またみずきちゃんがこっちに来るのだろうか。そうこう考えているうちに、放課後を迎えることとなってしまったというわけだ。

確かに、あまり乗り気では無いのも事実だ。事実であるのだが。「告白」というものは、並々ならぬ決心と覚悟が必要だ。大半のものなら経験があるから分かるかもしれないが、フラれた後の気まずさや悲しさ、社会的立場を侵すリスクを承知の上で決行する作戦だ。その覚悟や気持ちを考えると、無視したりだとか、ちゃんと返事をしないだとか、相手に対する尊敬の欠けた行為は許されるものでは無い。

……長ったらしく語ったが、もしイタズラとかドッキリだったら死ぬほど恥ずかしいな。

ま、まあ。それこそとりあえずは行ってみないとわからないのだ。

起立、礼、さよーならー。

??

休み時間はついつい慌ててしまい、先輩にどこで待ち合わせるとか何時に集合とかを全く告げずにあの場から立ち去ってしまった。それに気がついたのは放課後になったちょうどのことで、先輩からその件についてメッセージアプリで送られてきていたことに気がついたのも、まさにそのタイミングでだった。

再び慌てて返信をするも、反応は無い。
もう一度慌てて階段を飛ぶように降りて先輩のクラスに顔を出すも、既に彼の姿はそこに無かった。周りの生徒に居場所を聞くと「知らない」という意見が当然の如く大半を占めていたのだが「屋上の方に向かった」という情報も2，3個あったので、その言葉を信じて屋上の方に向かうことにした。
今度は駆け足で階段を上がる。まったく、この数分でなぜ階段を上下しなければならないのだ。それは、まあ、私が先輩にちゃんと話をしなかったのが悪いとは思うし、走っている原因は自分にあると言うのは分かってはいるのだが。だが、嫌な胸騒ぎがしているのだ。そいつのせいで、苛立ちが少しずつ募っていく。
4階の階段に差し掛かったあたりで、一度足を止める。というのも、声が聞こえてきたからだ。
だとすると、彼らの情報は正しかったのだろうか。
「ごめんね、こっちから呼んだのに遅れちゃって」
と、聞いたことのない女子生徒の声。
「大丈夫だよ、今来たところだし」
と、パワプロ先輩の声。
とりあえず、安心する。
先輩はここに居たから。これで、放課後のデートは出来るのだと思ったから。
そして、不安を感じる。
明らかにこの光景は、ただ事では無い。どう見ても恋愛に関するお取り込み中であった。
先程の彼らのやり取りは、まるで付き合いたての初々しいカップルの、初デートの時のやり取りみたいだと思った。胸が少しだけ痛む。私はその気持ちを誤魔化すように、そして彼らにバレないように、階段の手すりの下からこっそりと顔を出す。そこにはやはり、見たことのあるような気がする女子生徒と、パワプロ先輩か居た。
「えーっと。高橋か、その、手紙くれたのは」
「う、うん」

もう察しはついている。告白だ。告白の現場なのだ。
驚きと、ワクワクと、ちょっとばかりの罪悪感とともに、聖が以前言っていた言葉を思い出す。
「……先輩はモテてるからな。そのうち、彼女を作ってもおかしくない」
……。
まさか、いや。でも、目の前の光景を信じるのであれば、先輩はモテるという事実を認めるしか無いのだ。たった今思い出したのだが、相手の女子は女子バスケットボール部のエースであり、顔良し運動神経良し頭良し性格良し世間体良しのファイブツールプレイヤーな人物であったはずだ。カーストでもトップクラスの人物であり、この学校でも大半の人が知っているほどだ。というのも、彼女は会ったこともないのに大半の生徒とＳＮＳの相互フォローをしているから、ほぼみんな知っていた。フォロワー数は数千人近くいて、芸能事務所からも声がかかっているとかいないとかの噂もあるほどの人物だ。
女子として、ある種の最強タイプである。
そして、そんな彼女が、パワプロ　先輩に告白しているのだ。
だとすれば、このままだと――
（もしかして先輩、付き合っちゃうーっ!?!?）
ダメだダメだ。それだけはダメだ。絶対にダメだ。
とは言え、どうすればいいのだ。こんな場面、邪魔のしようもないし変な小細工を今からしたところでまた合わない。しかも、相手が相手だ。男子の理想みたいな女子だ。どうして断ることがあろうか。
「これって、そーゆー事だよね？」
先輩は頭の後ろの方をぽりぽりと人差し指で掻きながら、恥ずかしげな表情でそう言う。
「……う、うん。そーゆー事」
「お、おう」
パワプロ先輩の前に立つ女子も、照れたような表情で俯きがちに口を開いた。
何秒間かの沈黙が続いて、意を決したのか、その女子生徒は顔をが

ばりと上げると、真っ直ぐパワプロ先輩のことを見つめて――
「ずっと前から、好きでした。付き合ってください」
――い、言ったぁ。
ヤバイよ、どうしよう。もう止められないよ。
嫌だなぁ。
聞きたくないなぁ。
なんでこんな場所に来ちゃったんだろう。
せっかく先輩のことをデートに誘えて、とても舞い上がっていた先ほどまでの自分が馬鹿みたいだ。それがまさか一転して、目の前で好きな人が、誰かの告白を受けるシーンを見る羽目になるだなんて。ほんとに最悪だ。
ざあと雨音が静かな踊り場にはっきりと聞こえる。
冷たく響くその音は、ひどく沈んだ私の心と似ていて、余計に嫌な気持ちになる。
私は、耳を両手で塞ぐ。
そんなことをしたって、聞こえるのはわかっているのにそうせざるを得なかった。だからと言って、この場から離れることもできない。ここでの結論を先延ばしにする勇気もなかったのだ。
先輩も、意を決したようにまっすぐと女子生徒を見つめて、そして、口を開く。
「ごめん」
ああ、やはり。
当たり前だろう。あれほどの女の子に告白されたら、先輩だって受けるに決まっている。美男美女のお似合いカップルだと、周りもきっと認めるだろう。
……ん？
パワプロ先輩は、今何と――
「俺、今野球が1番大事でさ。たとえ付き合ったところで、多分、中々会えないだろうし楽しませることはできないと思うんだ。それに、俺たちはまだお互いのことを知らないだろう。そういうのはさ、仲良くなって、ちゃんと知ってからがいいと思うんだ」

「で、でも、これからお互いのことを知っていけば――」
「本当に、ごめん」
頭がフリーズしているのだけは、はっきりと分かった。
指先まで冷え切っていた体は逆に解凍されていく。血の巡りも心なしか良くなったと感じるほどだ。
安堵だ。今までに感じたことのないほどの、安堵だ。
とりあえず、一難は去っていった。まさか、断るだなんて、思ってもいなかった。……なんて言うと嘘になる。正直、心の中では断ってと祈り続けていた。
私は、ここに居たことを感づかれる前にこの場から雨音に紛れてゆっくりと退却しようとして。
「それなら、今日、どこかデートしよ。聞いたよ、野球部の練習休みだって。とりあえず、せめて、そこから」
「ごめん、それも出来ない。今日は、大事な後輩と出かける先約があるんだ」
大事な後輩。
今、先輩、私のこと。
大事な、後輩って、言った。
「〜〜〜〜っ!!!!!」
ヤバイよ、どうしよう。顔が、ちょーにやける。勝手ににやけてしまう。
この幸福をずっとずっと噛みしめていたいのだが、とりあえず今はこの場を去らなければ。
パワプロ先輩と、この女子生徒が降りてくる前に逃げないと。
階段を、最新の注意を払いながら、音を立てずに二段飛ばしで降りていく。高鳴る胸と、上がるテンションのままに、今日1番のスピードで階段を駆け下りる。
私はポケットからスマートフォンを取り出すと、すぐさまメッセージアプリを開いて、文字を打ち込む。
とりあえず校門で待ってるから
あと5分で来なさい！

でなきゃ先に行っちゃうからね、先輩♡
「ふっふーん♪」
まったく、今日はなんていい日だ。
練習こそ無くなってしまったが、先輩とデート出来て、先輩が独り身だと知れて、大事な後輩とまで言われて。
本当に、なんていい日だ。
雨の日が、好きになってしまいそうなほどに、だ。

みずきちゃんを泣かせたいだけの話　4

「せ、ん、ぱぁーいっ」
嫌な予感がする。
その理由は、つい先程同級生の告白を受けていたせいでみずきちゃんとの約束に遅れてしまったからだ。
彼女のことだ。
遅刻した俺に対して、きっと容赦のない態度を取るのだろう。しかも、雨の中で待たせてしまったのだ。機嫌を悪くしているのかもしれない。
「ご、ごめん、ちょっと用事があって……」
冷や冷やとしながら、校門の前に佇むみずきちゃんの様子を伺う。
彼女が傘をくるくる回すと、水滴が四方に跳ねる。怒っているのか、はたまた俺をいじる良いチャンスを得られたと喜んでいるのか。
一見した印象だと、後者であった。
「ふっふーん、まあ、許してあげる」
「えっ」
「えっ、って何よ」
「ああ、いや、その何でもナイヨー」
「変な先輩」
だが、みずきちゃんの態度は予想外のものだった。
「それじゃ、レッツゴー」
怒っている様子でなければ、こちらに対していたずらをする様子でもない。これすらも作戦なのか、と勘繰るが「レッツゴー」の掛け声に合わせて、傘を持たない方の手を、ぐっと空にかざす姿を見ると考え過ぎに思われた。
みずきちゃんは水たまりを軽快に跳ぶと、鼻歌を歌いながら歩き出す。俺も置いてかれぬようにと、後を追う。
「これじゃあまるでデートみたいだ」
俺はそう考えていた。だけのはずだったのだが。
彼女の素直な態度に呆気を取られており、また、安堵と油断もあっ

たのだろう。ついつい口からその発言は、声としてぽろりと漏れ出ていた。
やばい、と思ってみずきちゃんを見ると、彼女はくるりとこちらに振り向いて、
「ふふふっ、こんなかわいい後輩とデートだなんて光栄に思いなさい！」
どうやら、悪い気分にさせてはないらしい。
「自分で可愛いって言ってるよ」と言おうとして、止める。喉のギリギリのところまで出かかったその言葉をすんでのところで引き返させた。安堵と油断で茫然とした自分は、正常さを取り戻せたようだ。
以前にも、こんなやり取りをしたっけか。
ふと、先程受けた告白のことを思い出す。
現状だと、野球第一で、そう簡単に誰かと付き合おうだなんて思わなかった。
だのに、どうしてか、このかわいい後輩とのデートは、心が躍っている。
「そうだね、光栄に思うよ」
「え、先輩なんか素直でキモい」
「俺はなんて答えるのが正解なんだ」
くだらないやり取りに、彼女は満面の笑みをみせる。いつにも増してみずきちゃんはご機嫌だった。
クレッセントムーンを完成させた時と同じか、もしくはそれ以上にだ。一体全体、何があったのか。
「〜〜♪」
まあ、何があったかは知らないが、こうやって上機嫌な彼女を眺めているのは嫌いではなかった。機嫌が悪い時と比べればもちろん、ご機嫌な方が良いわけであるし、嬉しそうな彼女を見るのは好きだ。
「今日はパワ堂のプリン奢ってくれるんだっけ？」
「今日だけだからね！」
「それにしても一体、どーゆー風の吹き回しで――」
「その代わり！」

俺のセリフにかぶせてくるように、みずきちゃん大きな声を出す。
ぴん、と人差し指をこちらに向けて突き立てる。
ご機嫌な頬はいつもより紅潮していて、本当に楽しそうであった。
「パワ堂に行く前に買い物に付き合ってよね！」
「そのくらいなら、もちろん良いよ」
「それと、荷物持ちも！」
「……」
「何よその顔」
「いや、結局荷物持ちはさせるのね」
「当たり前でしょ」
「さいですか……」
どうやら、彼女にとって俺が荷物持ちであるのは自明の理であるらしい。
しかし、買い物となれば聖ちゃんやあおいちゃんと行く時も、どうせ自分から荷物を持つように言うのだから、結局は変わらないのかもしれない。
……ただ、みずきちゃんには、あの二人みたいなお淑やかさや遠慮などをぜひ覚えてもらいたい。あおいちゃんはお淑やかでは無いけれども……。
と言ってみたものの、気を一切使わないその態度は、親しみやすい彼女の魅力なのだろう。
「よーし、奢ってもらう分の働きはしてやろうじゃないか」
「さっすがセンパーイっ！　イケメン！　男前！」
「お、褒めたって何も出ないぞ」
「野球上手い！　優しい！」
「でも嬉しい！　何も出さないけどもっと褒めて！」
「頼れる！　部員の信頼ハンパない！」
「わはははは、もっともっと褒めてくれても構わんぞ！」
「あんまり調子に乗るな！」
「ひどいっ！」
「ふふふっ」

彼女は再び、綺麗な笑顔をこちらに向けた。
弱くもない雨が降る中、彼女の周りは不思議と光って見えて。小躍りするように歩くと波紋を広げる足元の水たまりも、彼女に照らされて眩しいくらい反射していた。
落ちてくる雨粒の、一つ一つがプリズムのように輝いている。周りの全てがみずきちゃんを美しく映える要因にも思えて。ここはまるで、水色の髪の彼女が主演の独壇場だった。
小悪魔のような笑顔でもなくて、作り笑顔でもなくて。
そんな彼女の笑顔に、俺はただただ見惚れていた。
??
そこそこ栄えている駅であるならば、大抵は近くにあるようなデパート。3つの路線が交わるお陰か、まあまあ賑わいのある我らがこの街にもそんな場所がある。私鉄の南口改札から歩いておおよそ3分程。駅と懇ろなのかと思うほどに、わかりやすい動線がその間には結ばれている。
駅から出て、信号にも引っかかることはないままに目的地のデパートへと到着する。
「一般的なデートだと、こんな場所は選ばないだろうな」
「それは……まあ、確かに」
ベットタウンであり、今日が雨の日だからというのもあるだろう。この施設内には平日といえどそこそこの人が入っていた。
デパートでお買い物。
デートであれば、それ自体は定番である。
映画を見た後にウィンドウショッピングをするもよし、おしゃれなレストランとの中継ぎに登板させるのもよし、街ブラのついでに入るもよしのトリプルスリーをも狙えるプレーヤーと同じだろう。言わば、デート界の山田哲人だ。
その証拠に、デパートの入り口には多かれ少なかれカップルはいた。
しかし、今向かっているのは4階。フロア名としては「スポーツ用品・アウトドア売り場」。

有名なアウトドアブランドならば、デート途中によってもおかしくはないのだが、俺たちは、デートではあまり行かないであろう、スポーツ用品売り場を目指していた。
みずきちゃんはデパートに入ると、一階のコスメショップを見向きもせずにエスカレーターへと向かった。曰く「どーせ先輩わからないでしょ」との事だ。
二階の婦人服、三階の婦人子供服、四階の紳士服も横目に飛ばして行って、辿り着いたのは４階のスポーツ用品アウトドア売り場。選ばれたのはスポーツショップ。
普通のデートであれば、やはり選ばれることはあまりない選択肢だろう。
「いいの？　ここで」
「何が？」
「いや、二階とかの方が服売ってるかなーって」
エスカレーターの最後の二段を、みずきちゃん軽々しく飛ばす。四階に到着して、二段後ろにいた俺に振り返る。
「上から攻めるのが、基本よ」
「つまり？」
「上の階からまわるだけだから。ちゃんと下の階も行くから、安心しなさいってこと」
それはつまり、俺の持つ荷物は、多くなるという事だった。
「それに私、ここで買いたいものあるし」
「ちょうどいいや、俺も新しい守備手欲しくて」
お互いが現役のベースボールプレーヤーであるから、ここはここで楽しい場所なのだ。ある意味では、一般的なデートからはズレてるのかもしれない。とは言え、お互いが欲しいものがあるのだから、ここに来たのは偶然ではない。
そして何より、お互いが楽しいのなら、きっとそれがデートの正解なのだ。
「みずきちゃんは何を買いに来たの？」
「マニキュア」

「マニキュアって……一階のコスメ売り場の方が売ってない？」
「おしゃれ用のじゃなくて」
　みずきちゃんはある売り場の方を指差す。
　すらりと伸びる手は、毎日の練習があると言うのにも滑らかな肌だ。きちんと手入れが行き届いているのだろう。
　マニキュア、と言われたからには、彼女の指先に視線が向いてしまう。
　一般的に、ネイルアートと言われるようなものは付けていない。青春盛りの女の子であるといえど、彼女は我が部の大事な投手でもある。それらを犠牲にした上で、美しい球を放っているのだ。
　だから、彼女の爪は特別に盛られているわけではないのだが。
　だと言うのに、それは真珠のような乳白色で、月光のように透き通り、鏡面のように照り輝いていた。本当に、美しかった。
　ヘタにネイルアートをしている人の爪よりも、何百倍も綺麗だ。
「スポーツ用の――」
「みずきちゃんの爪、すっごく綺麗だよね」
「――はぁ!?!?」
　突然の褒める攻撃に、みずきちゃんは珍しく顔を真っ赤にする。
　いつもなら褒められると調子に乗るクセに。むしろ「もっと褒めろ」と増長しているクセに。
　うまく彼女の不意をつけたのだろう。
「だってさ、ネイルアートとかしてるわけじゃないけど、整ってるし、綺麗だし」
「そ、そりゃあピッチャーやってるんだから爪くらい整えて当然よ」
「いやー、爪だけじゃなくて指も綺麗だしさ、野球で忙しいのにちゃんと手入れしてるの尊敬するよ」
「あ、あったり前よ。もっと尊敬しなさい！」
　ぷいっと、そっぽを向き「まあそれは良いとして」と続けて、
「その手入れをするために、スポーツ用の保護マニキュアを買いにきたの」
「そんなものまであったんだ」

「ピッチャーやってて爪割れると結構大変なのよ」
「でも、みずきちゃんの爪ほとんど傷がないし、凄い綺麗だよね」
褒め殺しの追加攻撃だ。
彼女を褒めちぎるとたまに見られる、口では否定しながらも照れている表情は、ついつい見たくなってしまう。
「そんなに褒めたって、何も出てこないわよ」
みずきちゃんは照れをの誤魔化すように仰々しい態度を取る。どんなに恥ずかしさを隠そうが、赤くなっている耳が彼女の心境を雄弁に語っていた。
横を向いたまま、彼女は黒目だけでこちらを一瞥する。
「って何ニヤニヤしてんのよ！」
「え、俺ニヤニヤしてた？」
「思いっきりしてた」
この前も矢部君に同じことを言われたっけか。
俺は少し、表情筋をうまく制御できるように鍛える必要があるのかもしれない。
まったく、と彼女は言い、スポーツ用マニキュアのある方角へと俺を置いて歩き始める。少し弄りすぎたかな、とも思ったが、そもそも普段はみずきちゃんの方が何倍も俺をいじってくるのだと気がつく。であれば、これくらいは多めに見て欲しい。
普段は弄る側のみずきちゃんだからこそ、弄られる際の防御力は低いのだろう。
俺は彼女の後を追いながら、店内を物色する。
守備用の手袋は――、あった。あそこだ。
それとみずきちゃんは――、どうやら目当てのものは手に入れたらしい。俺は彼女の近くへと遅めの駆け足で近寄り、
「選ぶの早いね、みずきちゃん」
「スポーツ用の保護マニキュアなんて、そんなに種類ないからね」
「それもそうか。じゃあ次はさ、俺の守備手を一緒に見てよ」
「次はさって、別にこのマニキュア一緒に選んだわけじゃ無いじゃない」

「うぐっ、ま、まあ……。分かった、後でちゃんと下の階を回るときに、男目線からの意見でみずきちゃんが服を選ぶの手伝うからさ」
「先輩のファッションセンス、当てになるの？」
「……それは、回ってみてのお楽しみという事で」
「まったく、もう」
そう言う彼女の表情は、決して嫌そうなものでは無かった。
俺は、自分のファッションセンスに自信があるわけではない。しかし、側から見ても可愛い彼女の試着七変化にお付き合いできるのは悪くないだろう。
「さっさと先輩の買いたいやつ選んで、下の階回ろ」
「うん、そーだね」
やはり、口ではつんけんした態度をとるし、口だけで無く行動でそれを示すことが大半であるのだが、それは彼女が決して素直でないだけで、こうやって一緒に選んでくれている姿を見るとホントに可愛い。
「またニヤニヤして、さっきから先輩のくせに生意気」
「それ、みずきちゃんの言える台詞か？」
「なんか言った？」
「いいえ何も」
慣れてしまえば、彼女の人間性を分かってさえしまえば、こんなくだらないやり取りだって、何よりも楽しく思えた。
そして俺は、白と黒をベースとして、彼女の髪と似た水色が差し色として入れられている守備用手袋を手に取って、これはどうかなと彼女に見せた。